

Only Oneの看護2020

令和2年度

訪問看護フェスティバル

東京都訪問看護人材確保事業

令和3年1月23日（土）[13:00～15:00]

オンライン開催ライブ配信[ZOOMウェビナー]

主催：公益社団法人東京都看護協会
東京都

共催：一般社団法人東京都訪問看護ステーション協会

公益社団法人東京都医師会

社会福祉法人東京都社会福祉協議会

後援：公益財団法人東京都福祉保健財団



プログラム

12:00～13:00 受付

13:00～13:10 開会・オリエンテーション
挨拶

13:10～14:10 基調講演『訪問看護を基盤とした“まちづくり”』
講師：一般社団法人だんだん会 理事長 宮崎 和加子 氏

14:10～14:20 休憩
DVD『Only one の看護』

14:20～15:00 公開質問会
※事前にいただいた質問に対してお答えします。

進 行： 宮崎 和加子 氏（一般社団法人だんだん会 理事長）

パネラー： 相田 里香 氏（居宅介護支援事業所 青い鳥 介護支援専門員）

江村 わくり 氏（府中市地域包括支援センター 安立園 保健師）

篠原 かおる 氏（訪問看護ステーション・青い空 管理者）

土谷 明男 氏（公益社団法人東京都医師会 理事）

15:00 アンケートのお願い・閉会



基調講演

◆基調講演

『訪問看護を基盤とした“まちづくり”』

講師： 宮崎 和加子 氏

一般社団法人だんだん会 理事長

【基調講演】

訪問看護を基盤とした“まちづくり”

一般社団法人だんだん会 理事長
宮崎 和加子 氏

私は還暦と同時（4年前の2016年）に、八ヶ岳南麓（山梨県北杜市）に移住しました。今は山梨県民ですが、還暦までの約40年間は東京で訪問看護・在宅ケア・認知症の方のケアに没頭して取り組んできた身です。そこで、東京での経験をもとに、移住した北杜市で不足しているサービス（かつ、私に取り組めるサービス）を立ち上げることに挑戦しました。

●4年間で6事業の立ち上げ

2016年に法人（一般社団法人だんだん会）を立ち上げ、その後、地域にとって必要なサービスをつくってきました。

- ①グループホームわいわい白州（認知症対応型グループホーム）
- ②地域看護センターあんあん（訪問看護ステーション）
- ③定期巡回てくてく24（定期巡回・随時対応サービス）
- ④わがままハウス山吹（多機能型シェアハウス）
- ⑤オレンジデイほかほか（認知症デイサービス）
- ⑥オレンジサロンわいわい（認知症カフェ・3カ所）

●事業運営の基本的な姿勢

〈介護・看護ではなく、「生きること支援」〉

「やって差し上げる介護・看護」ではなく、医療や介護が必要な（どんな）状況でも「自分らしく生ききる」ことを「支援する」姿勢で運営することを大切にしています。そのために『地域に求められるたくましく力量のあるプロの看護・介護・リハビリ集団』をめざしていくことです。

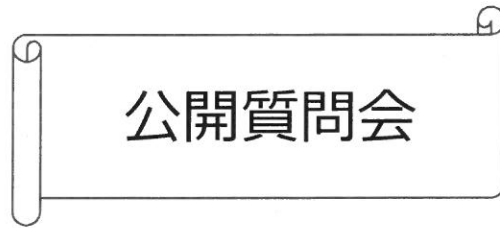
〈住民との協働〉

「地域でどういうサービスが求められているのか」、あるいは「住民の今の不安・要望はどのようなものか」について情報交換し、必要なサービスや施設と一緒に立ち上げていこうという姿勢を重視しています。これまでの中では、「わがままハウス山吹」の開設・運営で実践中です。

講演では、試行錯誤の取り組みの実際をご紹介します。

【プロフィール】

- 1977年 東京大学医学部附属看護専門学校卒業
 - 1978年 柳原病院地域看護課にて訪問看護担当となる
 - 1992年 東京都第1号となる北千住訪問看護ステーションを開設、所長就任
 - 2013年 一般社団法人全国訪問看護事業協会事務局長就任（2016.3まで）
 - 2016年 一般社団法人だんだん会を開設、理事長就任
- 認知症グループホーム、定期巡回サービス、訪問看護ステーションなど多数開設



◆公開質問会

パネラー：

相田 里香 氏（居宅介護支援事業所 青い鳥 介護支援専門員）

江村 わくり 氏（府中市地域包括支援センター 安立園 保健師）

篠原 かおる 氏（訪問看護ステーション・青い空 管理者）

土谷 明男 氏（公益社団法人東京都医師会 理事）

【公開質問会】 ケアマネジャーの立場から

「訪問看護」は魅力溢れ、頼りになる存在！

居宅介護支援事業所 青い鳥 介護支援専門員

相田 里香 氏

●多職種をつなぐ役割を担うケアマネジャー

私はケアマネジャーとして、「病気や障がいがあっても、認知症を患っても、暮らし慣れた地域で誰もが人生の最終段階までを自分らしく安心して過ごせますように」という願いを込めて、杉並区に「青い鳥」という居宅介護支援事業所を2017年に立ち上げました。現在は10歳代から100歳を超える方々の暮らしをサポートさせていただいています。

介護支援専門員（＝ケアマネジャー）は、2000年4月に施行された介護保険制度に位置付けられた比較的新しい職業です。しかし、介護保険制度を利用する方々のさまざまなニーズに応じて保健・医療・福祉にわたる多様なサービスが総合的・一体的・効率的に提供されるケアプランをつくります。その際には、それぞれの利用者さんに合ったサービス体系の確立をめざし、さまざまな職種で構成された「チーム」をつくり、まとめる必要があります。ケアマネジャーは、その大きな役割を担っています。

このように、私たちケアマネジャーは利用者さんの生活全般を見渡し、日常生活上の多様な生活課題やニーズを捉え、介護保険制度を中心に各職種につなぐことはできますが、病気やさまざまな障がいへの直接的なケアとなる、主治医の指示に基づく看護（医療処置・リハビリテーション等）や医療的なサポートを行うことはできません。

●医療的ケアだけでなく総合的な助言も含めたサポートをしてくれる

長い人生の中では、誰しも大小さまざまな困難に出会うことがあり、もしもの時には、誰かの支えや直接的な援助を得て、その困難を乗り越えていくものだと思います。その時に誰もが抱える「私ひとりで大丈夫だろうか」「家族だけで介護や治療を支えていけるだろうか」というような不安や孤独に対して、医療的ケアだけでなく総合的な助言を含め、さまざまな困難をサポートしてくれるのが「訪問看護」だと思っています。

私たちケアマネジャーも日々さまざまな場面で訪問看護師さんを頼りにしています。訪問看護は「まちづくり」の中心となる魅力溢れ、頼りになる存在です！

【公開質問会】 地域包括支援センターの保健師の立場から

「看取り」も「生活習慣病」も訪問看護が重要

府中市地域包括支援センター 安立園 保健師

江村 わくり 氏

●在宅療養に関わる多くの職種をつないでいく地域包括支援センター

地域包括支援センターには、社会福祉士・主任介護支援専門員（主任ケアマネジャー）・看護職（看護師か保健師）の3職種が配属され、地域で暮らす高齢者等の「住み慣れた地域で、その人らしく暮らす」ことへの支援をしています。その業務は、総合相談支援、権利擁護、包括的・継続的ケアマネジメント、介護予防ケアマネジメントと多岐にわたっています。

近年、訪問診療や訪問看護の拡充により、医療依存度の高い方々の在宅療養が可能となり、神経難病の方や末期がんの方の在宅療養を、地域包括支援センターが支援する機会も多くなりました。地域の病院から余命数週間という方の退院支援を依頼されることも増え、ご自宅に戻ってご家族とともに「最期の時間」を穏やかに過ごすための支援も行っています。

これらの在宅療養で、ご本人やご家族にとって大切となるのは、訪問診療医、訪問看護師、そして介護支援専門員（ケアマネジャー）を中心とする介護関係の人たちの支援です。地域包括支援センターは、ご本人やご家族のご意向を確認しながら、それらの人たちを結びつけるケアマネジメントの機能を駆使して、多くの関係する人たちの支援をしています。

●住み慣れた地域で穏やかに生活するための支援を訪問看護師と共に

看取りの場面において「最期を自宅で」と願っても、ご本人やご家族の思いは揺れ動きます。そうした思いをしっかりと受け止めながら、駆け付け、寄り添ってくれる訪問看護師さんの存在は頼もしく心強いものです。また、訪問看護師さんの適切な助言により生活習慣病の方々のQOLが改善されていく姿に、訪問看護師さんの存在は重要だと感じています。

今後も、訪問看護師さんとの連携を図りながら、地域包括支援センターの看護職として、高齢者の方々が住み慣れた地域で穏やかに生活するための支援をしていきたいと考えています。

【公開質問会】 訪問看護師の立場から

「8つの価値観」を大切に訪問看護を実践

訪問看護ステーション・青い空 管理者

篠原 かおる 氏

● 「利用者」も「スタッフ」も大切に活動していきたい

私は2008年4月1日に起業し、社名を「株式会社ピュア・ハート」と名付けました。事業は「訪問看護ステーション・青い空」から始まり、「デイサービス・緑の大地」「ケアマネジメントセンター・赤い糸」「ホームヘルプ・桃色珊瑚」と展開し、現在、4事業所を運営しています。

「ピュア・ハート」という社名は“純粹に心開ける姿勢を持ち続けたい”という想いから名付けたものです。今も、その起業当初の想いを忘れずに、「関わらせていただく人の人生の歴史や人生観・価値観を尊重すること、それと同時に、在宅医療従事者の雇用の在り方を根本的に考えることが大切」と思いながら活動しています。そのとき、私が大切にしている価値観は以下の8つです。

- ①「笑顔」笑顔は生きる力を与えられる。それを理解し、皆が皆、“笑顔”でいられるよう努力する
- ②「健全」病気も人生の一部であることを自覚し、病んでも健やかで清潔であることを大切にする
- ③「自然との共生」心身ともに健やかでいるために、緑や自然の多い環境を大切にする
- ④「余白」人間らしさを大切にし、柔軟に対応できるようにするためにすべての流れに余白を残す
- ⑤「多様性」個人の背景や価値観を大切にし、多様性を受け入れる。まずはその人自身を肯定することから始める
- ⑥「人間性を磨く」相手の立場に身を置いて考える技術を高め、同じ方向を見て「何が見えるのか」を大切にする
- ⑦「専門性を高める」本音を語れる信頼関係を築き、各々の専門性を高め、最大の支援を行う
- ⑧「チームワーク」各々の素質や専門性を最大限に活かすため、会社全体で利用者を支えていることを理解し、信頼していただくためにチームワークを大切にする

● “その人らしく安心して暮らせる社会”をめざして

「ピュア・ハート」のめざす未来は“その人らしく安心して暮らせる社会”です。それは、「信頼」と「安心」をキーワードに、“相手が本音を語れる状況がすべてを物語る”と考え、その状態をつくれる社会が広がることです。そして、関わる人すべてが、その人らしく笑顔でいられるように、私たちは活動していきます。

訪問看護師になって20年。私は、これからも地域を走り回ります。訪問看護はとても魅力的な仕事です。

【公開質問会】 医師の立場から

増える在宅療養を支える「訪問看護」

公益社団法人東京都医師会 理事

土谷 明男 氏

●相反する2つのことを同時に求められる医療従事者

今年一年で世の中は大きく変わりました。そう、新型コロナウイルス感染症のことです。私たちは大きな課題を背負いこみました。新型コロナウイルス感染症の拡大を防止するためには、人との距離をあけること（ソーシャルディスタンス）が重要だと言われています。

これまでも風邪やインフルエンザの時に発熱や咳などの症状があれば、他の人うつさないようにマスクをして距離を取って、みなさん気をつけていたことと思います。しかし新型コロナウイルス感染症では症状がなくても感染する危険性があるので、いつもソーシャルディスタンスを心掛けなければいけません。冒頭に課題と言ったのはこの点です。

私たち医療従事者は相手に対してどれだけ距離を縮めることができるのが最も重要なことだからです。「社会的には距離を取る」ことが求められ、「仕事では距離を縮める」という相反することを、医療従事者は同時に求められています。

●大変だったが知見が蓄積されてきている現場

さて、新型コロナウイルス禍における「訪問診療」はどうだったでしょうか？ 新型コロナウイルスの感染が拡大する中で、全般的に受診控えが起きました。特に小児科や耳鼻咽喉科では受診者は約半分になってしまいました。そのような状況にあって訪問診療は減少することなく、むしろその需要は増加しました。医療機関や高齢者施設で院内感染を防ぐために厳しい面会制限が行われたため、在宅で療養する人が増えたのではないかとされています。

現場は大変でした。どの程度、感染防御しなければいけないのか、新しい感染症で何も基準がなかったからです。防御体制をしっかり取れば取るほど、相手との距離が離れます。そこで私たちは大いに悩みました。しかしながら、どの程度なら感染を防ぐことができ、相手との距離をどの程度縮めることができるのか、少しずつですが知見が蓄積されています。

今後も在宅療養は増えることでしょう。それを支える「訪問看護」はますます重要となります。「公開質問会」では、日々変わる新型コロナウイルス感染症対応も含め、多くの課題を共有できればと思います。

訪問看護の魅力

◆新卒者

工藤 優子 氏

神奈川県出身

2019年 東邦大学看護学部卒業

2019年 南町田訪問看護ステーション ペンギン入職 現在2年目

◆中途採用者

津村 弘子 氏

千葉県出身

2005年 亀田医療技術専門学校卒業

2005年 亀田総合病院勤務

2008年 東邦大学医療センター佐倉病院勤務

2017年 摂食・嚥下障害看護認定看護師取得

2020年 メディカル・ハンプ訪問看護ステーション入職 現在看護師15年目
訪問看護師1年目

医療のプロとして「人と繋がる」ことができる“訪問看護”

南町田訪問看護ステーション ペンギン 工藤 優子 氏

私は2019年4月に新卒の新人訪問看護師として入職しました。訪問看護師をめざしたきっかけは、祖父の在宅介護・在宅看取りです。80歳の祖父は約3カ月、寝たきりでさまざまな在宅サービスを受けていました。そのとき、私は「訪問看護師」に出会いました。

「最期は自宅で過ごしたい」とよく口にしていた祖父なので、「叶えてあげたい、長生きしてほしい」という思いでいっぱいでした。退院時に「車いす」と言われていたのに歩けるようになり、周りも驚くほどの回復力を見せてくれて、最期は自宅で息を引き取りました。「祖父の希望を叶えられた、支えることができた」と、私たち家族は思いました。この経験を通して、私は「本人はもちろん、家族も支えたい」という思いが芽生え、訪問看護師になりたいと思うようになりました。

訪問看護は在宅生活に不安を抱えていても、それを可能にできる安心材料の1つです。患者・利用者の“生活の一部”として寄り添うことができるのが訪問看護と思います。実際の訪問看護では、急変時に適切な判断を求められるなど難しい場面もありますが、本人や家族が「あなたが来てくれてよかった、お話しできてよかった」と話してくれる嬉しく楽しい場面もたくさんあります。

訪問回数を重ねていくと、訪問して挨拶したときの表情で体調が大まかにわかるようになります。そして、小さな変化に気づいて尋ねると「体調が悪かった」と話されることもあります。この“小さな変化”に気づくことができるのも訪問看護ならではの魅力です。人と人との繋がりを大切にしながら、看護師が医療のプロフェッショナルとして携わることができる——それが訪問看護の魅力です。

利用者と一緒に考えながら支援できる訪問看護は“看護の原点”

メディカル・ハンブ訪問看護ステーション 津村 弘子 氏

人はいつか最期を迎えます。私は訪問看護に携わる前、「歳をとったら常時職員のいる施設に入所するのが最適だ」と思っていました。でも今は「好きなことをしながら自宅で生活し、最期を迎えたい」と考えるようになりました。

私が病院勤務から訪問看護を選択したのは、子育てを優先させるためでした。実は、学生時代の訪問看護の実習ではよい思い出がなく、自分にできるのか不安がありました。「家の中が汚くて、虫が出るかも……」「その場で判断しなければならない問題にぶつかったとき、決断できるのか……」など、不安がいつも頭をよぎっていました。けれども、家庭環境の不安は訪問回数の増加とともに慣れてきて、その場での判断も、今は携帯電話があるので、いつでも誰かに相談できるのです。

どうしても慣れないのは、突然の利用者のお別れです。生活保護を受け、アパートに独居のAさんは下咽頭がんの末期で手術適応はなく、自宅で過ごされていました。タバコやお酒も自由です。全身に湿疹が多かったので、シャワー浴の介助を中心に関わっていました。ある日、シャワー浴後、「また明日ね」といつものように挨拶をして、翌日訪問すると亡くされていました。「私がおっとうまく介入できていれば、Aさんは長く生きられたのではないかと考えてしまいます。

最期を迎えようとしている人々を援助していくことは簡単ではありませんが、看護の対象が生活者であることが私の支えです。病院の医療や看護師の常識を押し付けるのではなく、生活者の暮らしの中で看護援助をしていく。そのためには看護知識や技術の応用に加えて、倫理観や豊かな人間性も求められます。「その人がどう生きたいか」を一緒に考えながら支援していくことができる訪問看護——これこそ看護の原点だと感じています。

■ 参考

令和 2 年度訪問看護推進総合事業のご案内（東京都福祉保健局）

下記 URL または QR コードよりアクセスしてご覧ください。

<https://www.fukushihoken.metro.tokyo.lg.jp/kourei/hoken/houkan/sougoujigyougaiyouzu.html>



東京都訪問看護人材確保事業 実行委員会

[実行委員]

委員長

小暮 和歌子 ふれあい訪問看護ステーション

副委員長

倉澤 正子 荻窪病院

酒井 美知子 メディカル・ハンプ訪問看護ステーション

土屋 清美 つむぐ訪問看護ステーション

土谷 明男 東京都医師会

相田 里香 東京都介護支援専門員研究協議会

野月 千春 東京新宿メディカルセンター

横井 郁子 東邦大学看護学部

中田 有美 東京都ナースプラザ

望月 正敏 日本看護協会出版会

[東京都]

若狭 亜由美 東京都福祉保健局高齢社会対策部在宅支援課

上原 英子 東京都福祉保健局高齢社会対策部在宅支援課

[事務局]

黒田 美喜子 東京都看護協会

伊勢谷 佐代子 東京都看護協会

高麗 美由紀 東京都看護協会

渡辺 常子 東京都看護協会

久保田 かをり 東京都看護協会



ほ 訪問
な ナース
と 東京

©東京都訪問看護ステーション協会
イメージキャラクター ほなど